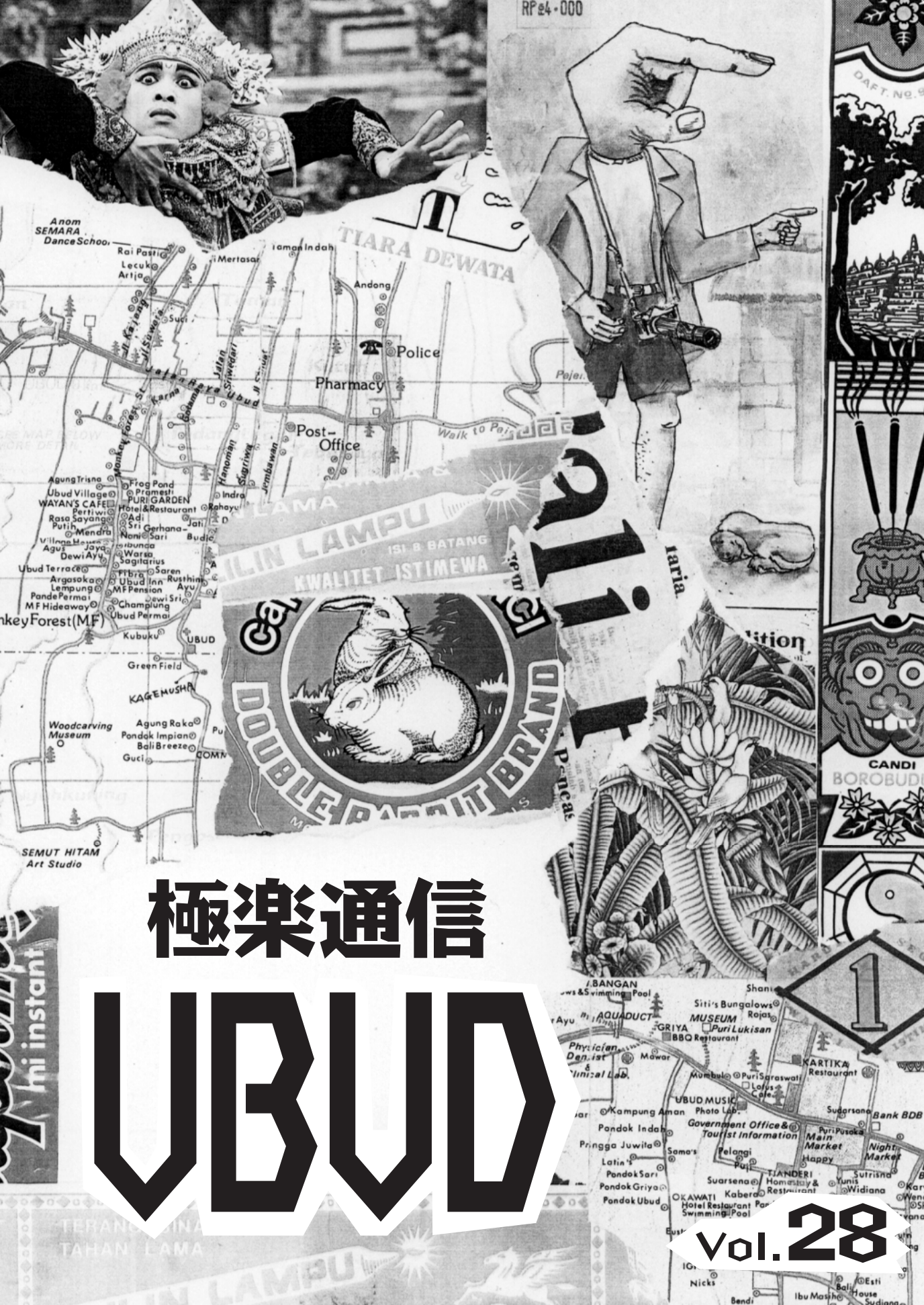


極楽通信

UBUD

Vol.28

photo:Y. Hori

バリの水田には必ずと言っていいほどBEBEKがいる。BEBEKはインドネシア語で家鴨（あひる）のことである。

家鴨は水田の中をバシャバシャと歩き回り、田に住み着く虫などをついばんでいる。見ていると好き勝手に水田を移動しているわけではなく、家鴨のリーダーに従って一斉に移動しているようだ。飼い主が長い竿のような棒を持って家鴨ご一行様を先導していることもあるが、誰もいなくてもこの団体は統率されていて、滅多に隊列をくずさない。習性をうまく利用しているのだろうが、農薬のかわりに虫を駆除してくれているわけでもあるから、頼もしい団体ではある。

しかも、このBEBEKを使った料理がめちゃうまいのであるからして、人間はBEBEKに足を向けて寝られないかもしれない。感謝。

堀　祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama
影武者に精霊あらわる！ ---------- 4
● Wariga ／バリの暦大解剖！
第三弾「ウク暦の吉日」---------- 6
● Kabar Baru Berita Lama
76 体の合同葬儀 ---------- 8
● Perawatan Anak【9】
正しい出産と育児 in Bali-9---------- 9
● Help Wanted（3）
バリで働きたいあなたへ…（3）----------12
● Pin-Pin-Boh/8
インドネシア語講座／ 8 ----------15
● Tsure-Zure ／バリ島つれづれ体験記 (2)
スバリ村へ----------16
● Dengue
デング熱って何⁉----------19
● C・O・L・U・M・N
放浪三昧----------20
● TOKO　BEST 店
Kumbang Sali ----------22
● Warung　味な店
Dewa Warung----------22
● Pondok Manis 私の常宿
Masih Bangalow ----------23
● Pesan & Kesan
旅人一声 ----------23
● Berita Terbaru
その他のニュース ----------24
● Orang-orang Ubud/28
うぶっな人々／ 28 ----------25
● O-Shi-Ra-Se
おしらせ----------26
● Pengumumaan
でんごんばん----------26

○表紙のことば○

四年前に、バリ島をイメージして作ったコラージュです。UBUDに住みはじめた1990年頃、シルビオ・サントーサ作のパスファインダーは、UBUDで売られている唯一の地図でした。私の愛用していたパスファインダーには、バイクで走破した道が、ところせましと鉛筆でぬりつぶしてあります。そして今でも、バリ島中の道を走破してやろうと、バイクで駆け巡る日々を過ごしています。

＊伊藤博史＊

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh によるDTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方でText Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

□ Macintosh format または Windows format の FD (Text Data)
□ E-Mail :
MHC03202：菅原 (NiftyServe)
GCB01162：堀　(NiftyServe)
hori@potomak.com (Internet)
eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

【実録】特派員報告 居酒屋「影武者」に精霊あらわる！

ある日のこと、スタッフのクトゥットが私のところへやって来て言て、「この一週間、私が管理していない日に限って、翌日のために残しておくキャッシャーのつり銭がなくなるのです」と困った顔付きで話しだした。「仲間のスタッフを疑うのは嫌なのですが、かといって私も気持ちが悪いのでバリアンに占ってもらいたいのですがいいですか？」と聞いてきた。私はなくなったつり銭が小額なので、「たとえバリアンに、誰がお金を持っていったのかがわかったとしても、それよりはキャッシャーのお金の管理の仕方を考え直した方がよいのでは」と答えた。が、クトゥットはとにかく近いうちにバリアンのところに行くといって帰っていった。そう言えば、今回だけでなく以前にも何度かキャッシャーのお金がなくなったことがある。しかし、バリアンに訊ねて、果たして原因（犯人）がわかるものだろうかという疑問も抱く。

その後二・三日して、正装に身を包んだクトゥットがやって来た。「今、バンリの高僧・プダンダのバリアンにお伺いに行ってきました。バリアンはこんな地図を描いて説明してくれました」と、一枚の小さな紙切れを広げ話しだした。地図には道を挟んで｛影武者｝と向かいにあるホテルとその裏手の川が簡単なスケッチで描かれてある。何も知らないはずのバリアンが｛影武者｝の周りにある建物やそのロケーションまでも、まるで見たことがあるかのように詳しく言う。そして、以前は店が繁盛し経営もうまくいっていたこと、現在は思わぬ出費がかさんでいることを克明に言い当てるバリアンに、クトゥットは恐いほど驚いたと興奮気味に話すのである。

お金のなくなる原因は、ロローハルス（精霊）にあるという。そのロローハルスは店が建つずっと昔からこの土地にいて、腰にカインを巻き上半身は裸で長い髪を頭の上で束ね女性の姿をしていると言う。｛影武者｝の建っている土地がちょうど精霊の通り道にあたり、最近の周りの建築ラッシュのために精霊の通り道もせまくなり困りはてて注意を促すためにちょっとイタズラをしたのだろう。よく、店の三番目のテーブルに座っていて、この店を見守っているとバリアンは言う。

だが恐ろしいことに、このまま特別なバンタン（供物）を供えずにいると、ますます店の経営は苦しくなり、いつかはbebarすると言う。bebar？　ハテそれはどんな意味かと辞書を引くと、そこには「散る。ばらばらになる」と出ているではないか！！　こりゃあタイヘンだ！！　えらいこっちゃ。ほな、どうせいっちゅうねん。バリアンは「コレとコレ、そしてコレとコレ、こういうバンタンを用意して大きなウパチャラ（儀式）をしなさい」とアドバイスしてくれた。

バリに長くいると、一度や二度はこんな不思議な話に出くわす。精霊、もしくは聖霊、そして妖怪のように人間をたぶらかすガマンと呼ばれる霊や数々の悪霊など、彼らは、ことあるごとに、その存在をわれわれに示してくる。たいてい災いのある場所は、本来供えられるべきバンタンがなかったり、または、足りなかったりすることが原因で、人々はバリアンのところへ伺い、どんなバンタンをどれだけ供えればよいか訊ねるのである。また、その精霊たちは、人間の作った道とはまったく関係のない場所を自分の通り道として使っている。そんな通りはあちこちにあるのだと言う。

UBUDの中心から少し外れたJl.Kajengにも精霊の通り道がある。それは、壁に囲まれたような路地になっている。路地を塞ぐと災いが起こるというので、むやみに壁の場所を変えたりせず空けてあるという。

われわれの身近な普通のバリ人の中にも目に見えないはずのモノを見ることができる人はいる。その中のひとりがなんと、スアール・アグンのスウェントラ氏だ。彼は、｛影武者｝の横の路地を歩く大男をよく見るそうだ。大男は歩くといっても地面の上30cmくらいを滑るように移動していると言う。そして、今や「極通」読者のお馴染みとなった魔法使いダドンも、身振り手振りで何かが路地を通り過ぎて行ったと伝えたこともあった。

男性を襲う（？）妖怪ガマンの話は、以前からいろいろなところで噂を聞いたことがあったが、まさか｛影武者｝にも精霊が出没していたとはびっくり仰天であ

る。思い出してみると、何年か前、チベットで瞑想の修業をしてきたという日本人男性が､その三番目のテーブルに座り「この位置に何かパワー・スポットのようなものを感じる」と言っていたことがある。ほかにも何人かが「このテーブルは、何か人を引き寄せるようなパワーある」と言っていた。きっと精霊の存在がそうさせているのに違いない。

休憩時間になると、三番目のテーブルあたりで寝転んで休んでいたバリ人のスタッフたちも、バリアンの話を聞いて以来、そのテーブル付近を避けて座るようになった。

われわれはバリアンの言い付け通りにウパチャラに良い日を選び、［プジャティ］と称される盛大なバンタンを用意し、パダンテガル村のプマンク（お坊さん）に来てもらい、手厚くバンタンを供えた。そして､､三番目のテーブルには毎日、ほかの大切な場所（ほこらなど）と同じようにバンタンを供え、店のロケーションの西南に位置する隅にもお供えをする特別な場所を設け、そこを通って行く精霊に失礼のないようにお供えすることにしたのである。

こんな話をあなたは信じるだろうか。また、精霊など目に見えないものの存在をあなたは受け入れることができるだろうか。日本でテクノロジーと豊富な目に見えるモノに囲まれて生活していると、こんな不思議な話とは縁がなくなってしまうかもしれない。

この島に永くいると、そんな目に見えないものの存在を信じざるを得なくなってくる。頭で信じ込むのではなく、何かもっと直感のような第六感のような本能に近いところでヒシヒシと感じるのである。

でも、「それってきっとクトゥットが嘘をついてるのよ」なんて、現実的過ぎて面白くない発言をする長期滞在者もいる。精霊の存在を信じるかどうかは別として“嘘をついてる”はあまりにもひどい考え方だ。そんな奴は、＜長期滞在する資格なし＞の烙印を押してしまうゾ！！

なんてちょっと興奮してしまったが、その後の｛影武者｝のようすは、あなた自身の目で確かめていただくために、ぜひ一度訪れてみてください。

Illust:Fumio

バリの暦（カレンダー）大解剖！
第三弾「ウク暦の吉日」

今回のバリ・カレンダー大解剖は、前号に引き続きウクのしくみをさらに掘り下げて、さらに色々ある吉日をご紹介しましょう。まず始めに、ウク暦の核ともいえるその名も「ウク」についてです。「ウク」は30種類あり、それぞれに名称がついています。そしてここでまた「七曜週」の登場です。七曜週の一週間分、要するに7日ごとに、ひとつのウクがつきます。ということは、7日×ウクが30種類で、イコール210日（ウクの一年）になるわけですね。ウクはめぐってくる順番が決まっていて、次のようになっています。

1. Sinta
2. Landep
3. Ukir
4. Kurantil
5. Tolu
6. Gumbreg
7. Wariga
8. Warigadian
9. Julungwangi
10. Sungsang
11. Dunglan
12. Kuningan
13. Langkir
14. Medangsia
15. Pujut
16. Paang
17. Krulut
18. Merakih
19. Tambir
20. Medangkungan
21. Matal
22. Uye
23. Menahil
24. Perangbakat
25. Bala
26. Ugu
27. Wayang
28. Kelau
29. Dukut
30. Watu-Gunung

それぞれのウクはそれぞれ違った性質を持っています。まあ、西洋風に言うと占星術の「星」みたいなものですね。バリでは、生まれた日がどのウクの週だったかによって、その人がどんな素質、性格を持っているかが分かるのです。それは市販されているバリ・カレンダーのいちばん裏にもインドネシア語で載っています。それを全部ご紹介するのはタイヘンなので、来年度以降の別冊編に期待してもらうことにして…。ここでこのウクに基づいたユニークな吉日を挙げてみましょう。それはtumpek（トゥンプッ）と呼ばれるものです。少しまたややこしくなりますが、前回勉強（？）した五曜週のkliwon（クリウォン）と、七曜週のsaniscara（サニスチャラ＝土曜日に当たります）が重なる日がtumpekになるわけですが、それが特定のウクとまたまた重なると、以下のような吉日になります。

● tumpek Landep（トゥンプッ・ランドゥップ）
2番目のウク、Landepの週

武器、もしくは鉄や金属で出来ている道具などに特別なお供えものをします。クリス（伝統的な武器。バリスやトペンの踊りの時にも身に付ける）やナタ、ナイフ、ハサミなどはもちろん、最近では自転車からオートバイ、車、冷蔵庫なんかにもお供えをするようになりました。おもしろいですね。

● tumpek Uduh（トゥンプッ・ウドゥー）
7番目のウク、Warigaの週

この日は我々人間に、恵みの果実を与えてくれる植物に特別なお供えをします。特にココナツ、バナナがその対象ですが、他にもランブータン、ナンカなどの果実のなる大きな木も含まれます。この日は早朝から、ブブール・サムサムという、コメの粉からつくられた、ドロドロのおかゆ状をしたお菓子がつくられます。そして、普段なら炊きたてのごはんを使うサイバンというお供えものが、この日はごはんではなく、このブブール・サムサムを使ったお供えものに変わります。また、チャナン（花をあしらったお供えもの）も、家のそこそこに供えられますが、それにもブブール・サムサムがあしらわれます。ブブール・サムサムは一度にたくさんつくり、お供えとして使った残りは家族の朝御飯がわりになります。

● tumpek Kandang（トゥンプッ・カンダン）
22 番目のウク、Uye の週

これは家畜の日。飼って世話をしている動物、おもに豚、鶏、小鳥などにお供えものを捧げます。どうも犬や猫は対象外のようです。地域によって違いますが、トゥンプッ・カンダンは他のトゥンプッと違って、家寺や家の敷地内などに置くお供えものも特に盛大になります。

● tumpek Wayang（トゥンプッ・ワヤン）
27 番目のウク、Wayang の週

これはワヤン（人の名前－ wayan －ではありません。影絵芝居の方です）に使う人形達のための日です。このトゥンプッ・ワヤンの日に生まれた赤ちゃんは、1 回目もしくは 3 回目のオトン（ウク暦の 1 年－ 210 日－ごとの誕生日）の儀式の時に、必ずダランや演奏者を招いてワヤン・クリッを催さなければなりません。また、一人前のダランにとっては、特に重要な日で、この芸能が無事に、かつ衰えることなく存続されていくように神様に祈ります。

Illust:Fumio

以上の 4 つがトゥンプッの吉日です。

さて、ここで話をまたウクに戻しましょう。ウク暦の一年は 210 日からなる、と前に書きましたが、それではいったいいつからこの第一日目は始まるのでしょうか。それは、第一番目のウク、Sinta（シンタ）の週の日曜日（七曜週の Redite）で、ちょうどこのあいだの 8 月 30 日がその日に当たりました。そしてこの日は「Banyupin aruh」（バニュピナロー）という日、吉日でもあります。…と言っても、ウクの新年を祝うというのではなく、この日は早朝、暗いうちから近くの川へ行ってマンデイをし、心身ともに清め、けがれを落とし、正しい精神と知識が身につくようにサラスワティに祈るのです。家々では女性達がナシ・クニン（黄色いごはん＝ターメリックを使って色付けしたごはん）をつくり、家族全員がこれをいただきます。ナシ・クニンのつけあわせは、卵焼き、グラン（小さな干魚を揚げたもの）や、ベ・トゥトゥ（鶏やアヒルの丸焼き）、生のキュウリやナスをスライスしたもの、小豆を揚げたもの、サウル（ココナツの果肉のフレークをターメリックやにんにくとともにカラいりしたもの）、など、それぞれの家で独自のバリエーションがあり、どれもおいしそう。主婦達は、家でつくったナシ・クニンを大きなバナナの葉にたっぷりと盛って、自分の実家におすそわけしたりします。この日に黄色いごはんを食べるのは、やはり黄色が神聖な色とされているからでしょう。

さらにウク暦の第一日目から順番に、またまた数々の吉日、祝日がめぐってくるわけですが、それは次回の極通でご紹介することにしましょう。
お楽しみに…！

な～んと・76 体の合同葬儀！

バリでは火葬式のことを、カーストに属する人のそれをプレボン、階級外の人のそれをガーベンと呼びます。そして毎年、7月～8月頃にあたるサコ暦のサシー・カロ（Sasih Karo＝第二月）が、特に火葬式をするのによいとされています。

トペン劇でも「やあやあ、今年もそろそろサシー・カロ。涼しくなってきて、夜、ひとりで寝るのは寂しいねえ。そのせいかこの時期に結婚する若い人が多いなあ」「うんうん、若い人は結婚、老人にとってはガーベンの季節じゃな」なんていうセリフを聞いたりします。

今年は特に、3年から5年に一度行なわれるというガーベン・マッサ（合同葬儀）の年にあたり、UBUD 周辺の村々がガーベン・マッサ・ラッシュとなりました。

なかでも、UBUD・パダンテガル村のガーベン・マッサは、パダンテガル村の三つのバンジャールとプンゴセカン村から76体のプトゥラガン（なきがらを納めて焼く張り子の棺。黒い牛や赤い獅子が多い）が出る、大きな葬儀となりました。

パダンテガルの村人は、三ヵ月も前から供物の準備に入り、一ヵ月前には、供物やプトゥラガン作りに忙しい毎日を送っていました。ひとつのバンジャールの集会所に20体のプトゥラガンが並ぶ様子は、なんだか超現実主義のモダンアートを見るようでもありました。ガーベンに消費する供物も半端な量ではありません。広々とした集会所が膨大な量の供物でいっぱいになるほどです。

9月15日の火葬式当日は、パダンテガル村のダラム寺院のあるモンキーフォレストの中にある火葬場で行なわれました。通常の火葬式では、一体か二体、多くて四～五体といったところですが、そのくらいなら狭くも感じないモンキーフォレストの火葬場も76体となってはところ狭しです。窮屈そうに整然と立ち並ぶプトゥラガンは、仲良く賑やかに、また嬉しそうにも見えました。

プトゥラガンにいっせいに火が放たれると、炎は天空高く舞い上がりあたかも山火事のよう。かくして三ヵ月も前から準備された供物やプトゥラガンが一瞬のうちに灰になったのでした。こんなにはかない儀礼のために、バリの人々は気の遠くなるようなお金と労力をかけるのです。　また、このガーベン・マッサの影響が、さまざまな事態に波及しました。たとえば、他の儀式を行うのに必要な供物を作るための材料が、あちこちで不足し、なかなか手に入りません。ほとんどのプマンク（司祭）がガーベンの準備につきっきりなので、他の儀式がある家はプマンク探しに大わらわ。そして、村人総出の準備のために、あらゆる仕事がとどこおり、注文した商品が出来上がってこない。など、たいへんでした。

火葬が終わったあとも、引き続いて次の段階の儀式（ニエカーなど）が待ち構えており、村人たちはまだまだ忙しい毎日を過ごしているようです。

正しい出産と育児 in BALI

by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 9

■ Namanya siapa?

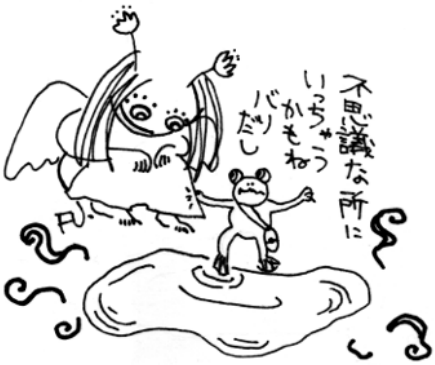
わがBabyがこの世に誕生してからやっと1ヵ月が過ぎた。

Wayan Gede Adi Wirabawaという、日本人にとってはいささか覚えにくい名前を天からもらって出産届も出したのだが、その後も家族からいろいろ注文がついた。

「正式名じゃなくてもいいから、日本の名前もつけてあげたらどう？」だの「やっぱいちおうハーフなんだからさあ、バリのバとジュパンのジュでバジュ…そうだ、バジュリノ、ってのもいいじゃん」だの言われるのだが、私としては息子に、りっぱなバリ人のセニマンになってくれればそれ以外何も望むこともないし、これから母子ともここでずっと生きていこうと思っているのに、いつまでもジュパン、ジュパン、と言われたくないわい。ということで特に日本名はつけなかったのである。しかし間もなく、悲しいことに親戚や近所の皆さんが勝手に「アデ・ジュパン（日本の弟）」とか「ワイ・パン（ブリ・ジュパン＝日本のお兄ちゃん、の略）」とか呼ぶようになり、中でも最悪のバージョンはワヤンのヤンとジュパンのパンをくっつけて「ヤンパン」なるちっともかわいくないニック・ネームであった。この子が将来、学校の友達やガール・フレンドからそんな風に呼ばれませんように.....。そして結局、家では愛称として「ニッ」と呼ばれることになった。Nikはバリ語の「Cenik＝小さい」の略である。ワヤンのヤンに続けて「ヤンニッ」とか、もっと略して「アニ」とかでもよい。多くのバリ人は、このように本名とは全く関係のないニック・ネームを持っていて、おじいちゃん、おばあちゃんになってもけっこうそのまま呼ばれ続けている。.....ということはニッもそうなのだろうか。まあ、何でもいいから、とにかく健康でいい子に育ってくれさえすれば、ヤンパンだろうが何だろうが自由に呼んでください、である。

■育児ストレスの原因は…!?

さて、この苦悩の1ヵ月のことは、後で思い出してみてもあまりはっきりした記憶がない。ぼんやりと霧がかかったような、大げさだがほとんど意識もうろうとした毎日であったような気がする。うとうとしかけたと思うと“オギャー”で起こされ、ボーッと眠い頭を必死に起こしてBabyに乳をやり、乳をやりながらまたうとうとする。.....といったようなことを昼も夜もただ繰り返すのみで、意識がちゃんとしていたのは何かを食べたり飲んだりしている時か、洗濯などをしている時くらいのもので、トイレでしゃがみこんでいる時でさえうとうとしていたような覚えがある。いつかこれと同じようなことを、女流作家が本に書いたのを読んだことがある。育児はみな大変なのだ。そればかりかその頃の私は育児に関して思うようにならないことが多くて、頭の中がストレスのカタマリだった。そんなストレスの原因は、なんと日本の友人が（もちろん善意で）送ってくれた育児書から始まった。それは最新刊でカラー写真もふんだんに入っており、育児に関する全てのことを非常にわかりやすく医学博士が解説しているものであった。それゆえに、なのである。それゆえに、読めば読むほど、実行しようとすればするほど、悲しいことにここではそれがことごとく不可能であることを思い知らされたのである。



■鼻汁吸引器

育児に必要な雑貨、医療用品、赤ちゃんの衣類、もうこれはお手上げだ。日本のテクノロジーのすばらしさに、今更ながら感心してしまう。育児書によると「新生児はまだ口でうまく息ができません。なにかと鼻がつまりやすいので、鼻水など出ていたら、専用の吸引器を使ってそっと取り除いてあげましょう」フムフム、ウチの子は生後3日目にして、鼻カゼジュルジュルの義妹からうつされて鼻水に悩んでいる。が、しかし、..... 専用の吸引器は ..... そんなモン、バリにあらへん！！（注：最近ようやくデンパサールの高級スーパーに輸入モノが並ぶようになった）..... で、バリ人はどうするか。お義母さんいわく、「赤ちゃんの鼻の穴に口をつけてね、チューッって吸ってあげるのよ」.....。チューッったって、キミ、いや読者の皆さん、赤ん坊の鼻の穴がいったいどのくらい小さいかご存知だろうか。ましてチューッと吸って口に入るのは鼻水である。いくらわが愛しのわが子のものでも、そしてあとから吐き出すにしても、鼻水は鼻水だ。それに、こんなに弱々しい新生児の鼻の穴を思い切り吸ったら、なんだか内蔵まで飛び出てきそうで、恐いったらありゃしないではないか。初めはおっかなびっくりだったが、数ヵ月かかってやっと要領よくわが子の鼻汁をチューッと吸ってやるのが上手くなった。今では「えーっ、そんなキチャナイことできなーい」と言って自分の赤ん坊の鼻汁を吸ってやろうとしない義妹にかわって、私が吸ってやるくらい慣れてしまった。

■水温計

「赤ちゃんは自分で体温調節ができません。沐浴のお湯は39度くらいに保ちましょう。このくらいかしら、と思うと案外熱すぎたりするものです。カンタンに計れる専用の水温計が市販されていますので利用しましょう」そんなモノバリに売っちゃあいないよう。水かげんをよーく見ながら、よーくかき回さないと、水とお湯ってのは思ったようにすぐ混ざらないものだ。でもお義母さんは、まずベビーバスに水を入れ、ヤカンから熱湯をジョボジョボと注いで、「これくらいかしら」ぐるぐる、とカンタンに、それも上の方だけ2～3回かきまぜて、ハイ、おしまい、である。なんてったって5人も立派に子供を育てあげたお義母さんなのだから、新米ホヤホヤのママである私などより何もかも慣れているに決まってる。..... と思いながら、念のためお湯の下の方まで手を入れてみると .....。確かに、上の方の水はいいぬるま湯かげんになっているが、下の方はまだ冷たい水であるではないか！！　退院して家に帰ってから今までに、何回大切なBabyを、お義母さんのはってくれたお湯でマンディさせただろう。かわいそうに、モノも言えないBabyはおしりや足が冷たい水につかって、さぞ気持ちよくない思いをしたに違いない。ああ、ごめんねぇ。それ以来私はベビーバスのお湯を、いささかムキになって激しく何度もかき回し、神経質なくらい湯かげんに注意するようになった。「もうこれでいいだろ!?」とのんきそうに言う夫を尻目に、私は頭の中で「39度、39度」と呪文のように唱えながらお湯をバシャバシャとかき混ぜるたびに、「ああ、あの本にのっていた水温計があったら .....」といつも考えていた。あとで考えると、この「39度」に、私はこだわりすぎていたようだ。「人肌よりちょっとあたたかめの、ぬるま湯でいいのよ。そんな39度だなんて考えなくても」と、ある日本人のお母さんに笑われてしまった。

■ミルクびん消毒

「赤ちゃんのミルクびんは使う前に必ず消毒しなければなりません。煮沸消毒は15分です。それ以下だと死なない菌もあるのです。つけておくだけですすぎ不要の消毒液が市販されています。うまく利用しましょう」ここまでくるともう、タメ息しか出ない。はあ、そんな便利なものが日本にはあるのねえ .....。でもいいわ、私は煮沸消毒するから。..... が、しかし。ミルクびんをナベに入れ、水をはって沸騰させ、時計を見る。よし、あと15分。もうそろそろだな、と思って台所に戻ると、ガス台の火が消えている。「あれ!?」指を突っ込んでみるとすでにもう冷めかけている。「誰が消したのかなあ」と独り言を言っていると、そこへお義母さんがやってきて、「ああ、もう沸騰してたからね、消しましたよ」うう .....。赤ちゃんのまわりの衛生状態を、なんとかいい環境にしてやりたくて、以前から私は努力して家族に説明しようとしてきた。でも、「細菌」だの「ウィルス」だの言ったところで、お義母さんたちが目に見えないモノのことをそうカンタンに理解できるわけがない。冷蔵庫に入れる製氷皿や、冷水用ポットの中に、

いつだったか、義妹が水道の蛇口からそのまま出た水を入れていたことがあった。「えっ!?　そのお、お水.....そのまま飲むの!?」とおそるおそるたずねた私に、義妹は「ああ、ダイジョーブ、tidak apa apa よん。冷えたらバイ菌って死ぬのよね」と、ほがらかに答えたのであった。学校の授業でそこまで教えてくれなかったのか、それともたまたま義妹が授業中に居眠りしていたのかわからないが、とにかく日本のお医者さんや、若いお母さんが見たらアワを吹いて卒倒しそうな、けっこうすごい衛生状態の中で、彼らは子供を育てているのである。そういう私も、汚い水おけの中に入れてある素焼きのつぼの水（まわりからしみ出た水がつぼの中にたまる。これがひんやりしておいしい)、これはもちろん生水だがゴクゴク飲むし、井戸水ならこれもナマでゴクゴクしてしまうほど平気になってしまった。でも自分は平気でも、やっぱり子供のことになると気になってしまうのである。

こんなのは序の口で、ひとつひとつストレスを数えあげていたらきりがない。でもいちいちグチっぽくなってしまうのでやめておこう。まあ、今となっては全てが笑い話なのだが。とにかく鼻汁にしろ、水温計にしろ、消毒にしろ、そんなものがなくてもバリの人々は立派に子供を育てあげてきたのだ。実際、ニッもひどい下痢を何度かしたことはあるが、それは日本の赤ん坊もするし、ニッはいいかげんなマンディや消毒でけっこうへいちゃらでスクスク育ってきた。赤ん坊というものはそもそも太古の昔から、強く、丈夫で、ちょっとくらいの育児の失敗じゃあビクともしないモノなのだ。それでも親の心情としては、子供の成長のある区切り区切りで、「ああ、よくここまで丈夫に育ってくれた。これからもすくすく元気に成長しておくれ」と、神様なり何なりに感謝せずにはいられない。生後42日目(ブラン・ピトゥン・ディノ)、105日目（ニャンブーティン)、そして初のバリ暦の誕生日（オトン）という数々の通過儀礼をするのも、赤ん坊の成育を見守る家族のそんな純粋な気持ちから始められたに違いない。私も初めて知ったことだが、日本にも昔から生後7日目とか、1ヵ月前後のお宮参りとか、初誕生の“御食い初め”というような習わしがちゃんと残っている。習慣や、育児の仕方や、使うコトバが違っても、子供を思う家族の気持ちは古今東西、みな同じなのだ。ママはこの島を愛して、おまえのお父さんを愛して、おまえを生んだのよ。ちょっとやそっとのことじゃあくじけないわ!!　.....なんて言いながら、実はまだまだ母のグチは続くのであった。チャンチャン。

Illust:Fumio

つづく

バリで働きたいあなたへ

3

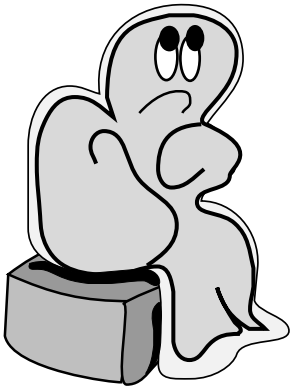
Megumi

HELP WANTED

今まで２回、バリで働くための手続き関係についてお話ししてきました。前回お話しした就労許可と滞在許可を取得した場合、２年間バリに滞在できます。つまりビザの取得のために外国に出る必要がないのです。１年目にデンパサールのイミグレーションで延長の手続きを行いますが、これとて私の場合、すべてイブＮが代わりにやってくれました。

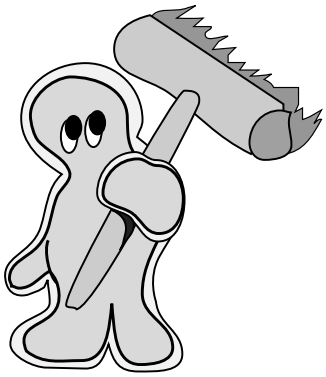
バリで給料を頂いて働くというのは、とてもとても魅力的なことのように感じられます。私とてずっとそんな身分に憧れていました。ウブドでお店を開いている日本人や欧米人も多い昨今ですが、私のように“長期滞在したい”とは思っても、“こんなお店がやりたい”という積極的な意志がない人間もいます。かと言ってガムランやダンスを勉強したいわけでもない。ここで、給料を頂けて就労ビザも取れて、正式に働けるようになればどんなにいいだろうと、そう思っている人は沢山いると思います。実際この１年半、随分沢山の方に“どうしたらここで働けますか”と尋ねられました。中には“どんな仕事でもいいです。給料にもこだわりません。”とおっしゃる方も…。でも、やっぱりよく考えてみてください。前回２回にわけてお話しした、ビザと、もろもろの手続きにかかるお金、時間、労力…ひとりの外国人を雇用するのは、実はとてもとても大変なことなのです。これだけの苦労をして外国人を雇用するのですから、“どんな仕事でもいい”筈はありません。それなりに、専門の知識や経験、日本人としての“成熟度”を要求されるものだと、私はそう思います。とは言っても、別に“特別”のことを要求されるわけではありません。要求されるものは、“外国で働く”ということを考えるならばしごく“当然”のことです。
よく尋ねられることですが、私がこのアグンラカ・バンガローに職を得たのは、本当に偶然でした。特別に就職活動をしたわけではありませんが、いつかバリに来たい、バリで働きたい、ということはバリに来るたびに意思表示をしていました。とは言っても私が住みたいのはあくまでも“ウブド”。クタやサヌール、ヌサドゥアならいざ知らず。ウブドで外国人を雇用してくれる現地企業などまずないだろうと、半分はあきらめかけていたところに、『影武者』の伊藤さんを通じて、アグン・ラカさんがバンガローの日本人マネージャーを探しているという知らせ。１も２もなくバリに飛び、ラカさんと奥さんに会って、とんとん拍子に話は進み、それから２ヵ月後にはあんなにも憧れたウブドの住人になっていた、という次第…。

バリで働きたい、と相談を受けて、お話ししてみると、こちらに全く日本人の知り合いがいない、という方がいらっしゃいます。外国に旅行に来てまで日本人でつるみた



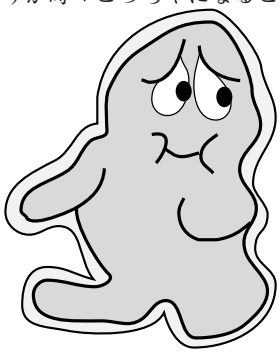
いとは思わない…とおっしゃる方もいらっしゃり、その気持ち、確かにわからないではないのですが…でも、本当にここで暮らしたいと思ったら、ここに暮らしている日本人にまず話を聞くのが第一だと思います。その人はどういうかたちでバリに滞在していて、どんな生活か、お店を開きたい場合はそのノウハウから、どんなカルチャーショックがあるか、どんなことに唖然とさせられるか、またどんなことが楽しいか…それはみんなそれぞれ個別の答えしか返って来ないとは思いますが、その中から、自分に合った滞在のスタイルのヒントが見つかる場合もあると思うのです。“バリで働く”ことよりも、もしかしたら違う形での滞在の方が良いかも…と思う場合もあるかもしれません。いずれにせよ、まずこちらに長く住んでいる日本人に会っていっぱい色々なことを教えてもらいましょう。バリ人にも日本人にも信頼されている人…『影武者』の伊藤さんのような人がいいですね。（よいしょ!!）

さて、そういうわけで私の話に戻ります。アグンラカ・バンガローでの私の仕事は、主に日本人のお客様のお世話と、従業員の面倒をみること…大きくわけてこのふたつです。日本人のお客様のお世話…というのは言葉の通りですが…従業員の面倒をみること、というのはどういうことか。つまり、私はここでマネジャーとして仕事をしている”というより、彼等の面倒をみている…としか思えないことがしょっちゅうなのです。しかし誤解されないようにまず申しあげれば、バリ人ひとりひとり、確かに個人差はありますが、彼等はけっして、“能力がない”という事はありません。自分の仕事については経験からきちんと把握していますし、業務を遂行する能力もあります。しかし、何か突発的な出来事、判断を要求されるような事柄、緊急に対処しなければならないような状況には弱い面があるように思います。それどころかウチの一部のスタッフなどはこういう場面に慣れていないので、いきなり“凶暴”になる場合もあります。急に怒り出したり、ひどい時は物を投げ付けたりすることもあります。だからまず、彼等をパニックにさせないようにしなければなりません。それから、ウチのスタッフに限って言えば、他人の立場まで考えて全体を見て判断するという能力はあまり持ち合わせていないというか…そういう場合の訓練が足りないように思います。何か間違いが起こった時、“どうしてそうなったか”聞くと、“誰々がやった”という答えが返ってくることがよくあります。“誰々がやった、私は知らない”と言われるたびに私は“怒っているんじゃない。どうしてそうなったか考えて欲しい。いつか自分も同じことをするかもしれないんだから”と言うのですが、相変わらずこの“誰々がやった。私は知らない”はなくなりません。それから“こういうことが起こっていると聞いたのだけど…”と聞くと“誰が言った？”と言われることもあります。起こっている事柄の問題より、誰が私に“告げ口”したか、ということの方が大きな問題なのです。仕事が“個人レベル”の域を出ず、ひとつのチームとして機能していないことがしばしばです。例えば朝番のフロントの者に、明日チェックアウトのお客さんが部屋を夕方まで使いたいと言っているから、そのつもりでいてくれ、と伝えると、“OK”と言うのですが、翌朝の朝番の者にその旨は伝わっていません。こんなことはたびたびです。“明日何番の部屋はレイトチェックアウトだから、夕方6時頃に会計をして6時半にタクシーを呼んでちょうだい。運転手は誰か、だれが運転手を手配したか、料金はいくらか、ノートに全て書いておいてちょうだい”とフロントに言い置き、さらに翌日の5時半頃にルームボーイを探し、“何番の部屋に行って荷物を運ぶ手伝いをしてちょうだい”と言わなければなりません。しかしむしろ彼等は、“上から命令される”ということを望んでいるように感じることもあります。“これはあなたの仕事だから自分でよく考えて、必要なところに全部連絡して手筈を整えてちょうだい”ということには弱いのですが、“これとこれを準備してここに連絡していついつまでにこうしておいて”と言えば、きちんと出来ます。これには色々な理由があると思います。例えばバリのカーストの問題なども考えてみなければいけないのかもしれません。ある事柄をワヤンに頼んだとします。それを実行するのにワヤンはチョコルダとマデとグスティに仕事を割り振らなければならないとします。ところがこうした場合チョコルダとグスティに、ワヤンが命令出来ずにいつまでたっても事が終わらない…といったことも往々にしてあったりします。だから私は仕事を命じる時に、ワヤンと相談してグスティとチョコルダには私から仕事を依頼する、そして全体のまとめをワヤンに頼む…といったふうに打ち合わせしなければならなかったりします。勿論全ての人間がそういうわけではありません。アグンラカ・バンガローのフロントとルーム係は、スードラ階級の者がチーフをしていますが、彼等は自分より上の階級の人間にもきちんと指示を出しています。しかし例えば同じルームボーイ同志だったりした場合、スードラの人間に頼むとその子がひとりで仕事を抱え込んでしまって、

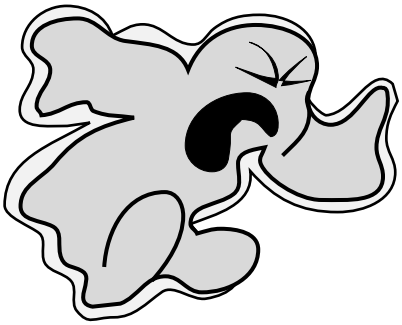


つまり階級の違う仲間に仕事を命令できない…といったこともしばしばあるようです。それから、私が見る限りでは、階級のある子達は、同僚のスードラの子に命令されるより、私に命令されたほうが気がラク…なように見受けられることもあります。なにか事を頼んでいつまでも出来ていなくて“どうしてやっていないの”と責める前に考えてみることが、それはそれは日本より沢山あります。こういうことがなんとなくわかってくるのに、だいたい1年くらいかかりました。最初のウチは“言ったことがいつまでも出来ていない”ということにただイライラしていたのが、少しづつこういったことがわかってきます。が、わかってきたところで、それは“面倒くさい問題を抱え込む”だけなのですが…。

だから私はバリ人と一緒に働く場合、こういったバリの特殊な事情を理解するという前提に立った上で、それを敢えて“知らないフリ”をする時も、逆に必要な場合があると思っています。すべてバリ人の立場にたって考えることは、やはり私には出来ません。まだまだ私にはバリのことがそこまでわかっているわけではありません。それに、いくら彼等がパニックに弱いと言っても、いやおうなしにそういう状況に陥ることだってあります。お客様と直接関わる場面では、お客様を優先しなければならないこともあります。そんな時はつい私もかっとして、“バリの人だったらけっしてこういう怒り方はしないだろうな”というような怒り方を、してしまうこともあります。感情をおさえきれなかったりすると、私はしばしば日本語で怒鳴ることもあります。みんな遠巻きにして私を見ています。勿論そのあと自己嫌悪に陥るのですが、でも、我慢はしません。“そういうことをされると腹がたつの。そういうことはしてほしくないの”という私の気持ちは、口で説明出来なければこういう態度で伝えるしかないのではないかと思います。バリの人の仕事のやりかたは、あくまでも“無理せずゆっくり”。それは構わない。だけどそれが、“ラクをすることだけを考える”ようになってしまったら、どこかで歯止めをかけなければなりません。自分のペースで仕事をすること、と、自分に都合のいいように仕事をすること、は違うのです。ウチのスタッフの場合このあたりが時々ごっちゃになることがあります。



限りなくバリ人を理解するように努めながら、バリ人とは明らかに違う自分を自覚すること…私にとってバリの人たちと仕事をしてきたこの1年半は、一言で言ってこんな感じの1年半でした。それでも、日本と違って“いいなあ”と思うことは、ここではだれもが“自分のペース”で仕事をしている、ということ。“人と競う”必要がない、ということ。誰でもそのままの自分で、足りない部分を認め合いながら毎日を生きていけること…。　先日ウチのお客様が従業員と話していて、みんながこんなことを言っていた、と私に教えてくれました。“メグミさんてどんな人？”と聞いたお客様にスタッフの一人が“恐い”と言ったそうです。“すぐ怒る”と…。そうなんです。私すぐ怒るんです。かっとするとつい昔の業界時代の癖が出て…（なんせ私の仕事は、劇場のアシスタントプロデューサーというもので、このアシスタントというのが曲者で、アシスタントなんていうものは、すべてのセクションの雑用係のようなもの。気の荒い道具方の職人さんたちからなど“誰だよ、制作気がきかねーなー。何年この仕事やってんだタコ！”などとぼろくそに言われ、鍛えられてきたのでした。かく言う私もアルバイトの大学生の男の子などには“とろとろすんじゃないよ。頭使いな、いっぺんに3つの仕事出来ないでどーする！”とか怒鳴りつけていたのですね。恐いですよね…）が、そのあとウチのスタッフ達は、笑いながら“でも、優しい人”と私のことを言っていた、ということでした。願わくばこの最後の一言が、お客様の“作り話”ではありませんように…。そうです、本当は私いつもウチのスタッフに感謝しています。まだまだ時々怪しげなインドネシア語を使う私の言う事を、一生懸命聞いてくれてありがとう。試行錯誤の私のバリでのお仕事の日々は、これからも続きます…。



●つづく●

■砂はなんでも知っている？

Bali Post 日曜版／edisi hari minggu は第一面の政治向きの話題をのぞくと、映画、音楽、テレビの芸能ネタから人生相談、結婚相手の募集／ Kontak Jodoh, ウチの赤ちゃん自慢だの連載マンガに小説、文通コーナーもあればクイズもありと、全ページおもちゃ箱をひっくりかえしたようなにぎやかさだ。そのなかでも、ぴんぴん坊がとりわけ気に入っているのが、星占い／ Ramalan Bintang。ぴんぴん坊の場合、星座は牡羊座／ Aries だが的中率はかなりの高さで、いまやこのコーナーはぴんぴん坊にとって「暗夜の一灯」「人生の指針」となっている…かもしれない…ような気がする。

“占い、予言”を意味する ramalan は ramal の派生語で、もともとの意味は “pasir yang dipakai untuk melihat nasib atau mengetahui yang akan terjadi ／運命を見たり、これから起こることを知るために使われる砂”。砂といえば普通に使われるのは pasir だが、この ramal はどうやら特別の砂のことらしい。なんとなくアラビア世界を想像させるような占いのやり方だが、事実 “negeri ramal” というと “アラブの国” をあらわす。ちなみに日本は “negeri matahari” とか “negeri sakura” と呼ばれている。

インドネシア語では “星占い” に相当することばには、nujum というのもあって “melihat nasib orang atau apa saja melalui perbintangan ／占星学にもとづいて人の運命などを見る” という本来の意味からすると、ことばとしてはこっちのほうがふさわしい気がするのだが、実際には ramalan bintang が頻繁に使われている。

■ Putri Wong Kam Fu さんの星占い

前置きのお勉強がちょっと長くなってしまったが、話を Bali Post の Ramalan Bin tang コーナーにもどそう。占っているのは、Putri Wong Kam Fu さんという、掲載されている顔写真で見るかぎり、かなり太めのご婦人。パンパンに膨らんだほっぺたなんかプルナマ状態だ。ところが眉間のあたりにはかすかな愁いがただよっていたりして、人の運命（さだめ）を見つづけてきた哀しみがそこはかとなく感じられる…かな？

6 月から 8 月始めにかけてのぴんぴん坊の調子は本当にひどかった。しかも、この “ひどさ” というのがタチの悪いもので、これといった不幸な出来事があっての話ではないのだ。肉親が死んだとか（しぶといくらいに健在だ）、失恋したとか（そんな青臭いのご免だ）、犬に噛まれたとか（4 月にやられた）、交通事故にあったとか（忘れもしない去年の 7 月 12 日の災難）、とにかくそういう誰の目からみても分かりやすい不運というのではない。言うなれば運勢の “勢” の字がしぼんでしまって、まったく動きが止まってしまったような按配だった。この状態を太めの Kam Fu 先生はかくのたまわれたのだ。

“Perjalanan hidup sudah sampai di tengah samudera tiba-tiba berhenti karen a tidak ada angin yang mendorong perahu layar anda ／人生航路は大海原の半ばに達して、突然止まってしまう。帆船を押し進める風がないゆえに”

ちょうど凪の状態にあって、ぴんぴん号は進むに進めず、引くに引けないありさまなのだ。だから悪いことも起きないかわりに、良いこともまったくない。そして毎週毎週、不運のご託宣はくりかえされる。

“Perkembangan nasib dan rezeki belum stabil ／運命の進展も生活の糧もいまだ安定を見ず” だの、“Yang terjadi biarlah terjadi,percuma disesali. Bintang na sib memang lagi suram ／起こってしまったことは、起こってしまったこととして放っておきなさい。
悔やんでも無駄。星のめぐりは、いまだ暗し”

さえない星のさだめをしょった、ぴんぴん坊のその後の運命やいかに？　続編を乞うご期待！

VOL. 2
TAKA-chang

バリ島つれづれ

■スバリ村へ

其の1・川マンディーに挑戦！の巻

ある日、スバリ村にバリ人の友達グスティ君を訪ねた。グスティ君とは“ジョゲッ・ピンギタン”を通じて出会った仲。彼は“ジョゲッ・ピンギタン”をはじめとして、スバリ村の伝統芸能の復興に一役かっている。話好き、世話好き、そして素朴なナイス・ガイだ。スバリ村には以前から興味があった、と伝えると、「じゃあ明日遊びに来い」と誘ってくれたのだった。スバリ村はチャンプアンの北にある小さな村だ。現在、106世帯が暮らしている。そこにはバリの伝統的な家並みと素朴な風景が残っていて、散歩するにはもってこいの場所。村の中心を走る通りから一歩踏みだして小道にそれると、ジャゴー椰子（砂糖椰子）並木や、美しいライステラスを目のあたりにできる。ちなみにジャゴー椰子からはトゥアッという地酒がとれ、トゥアッはスバリ村名物でもある。トゥアッはすぐに発酵してしまうため、二日程しかもたない。スバリ村は産地なだけにとびきり新鮮なトゥアッをいただけるのだ。何度も使ったであろう薄汚れたアクアのペットボトルに入れられた、白く濁った色のトゥアッは、なんだか飲むのに勇気がいるようだけれども、酒好きの友人に言わせれば「う〜ん、ジューシーでうまいっ」のだそうだ。このスバリ名物をぜひ試してみたい方は、道端のワルンで「トゥアッが飲みたい」と言えば持ってきてくれる。グスティ君の家でもOK。世話好きの彼のことだから、喜んで飲ませてくれるに違いない。ちなみにトゥアッは1年中飲めるが、最も沢山とれるのはバリ暦でいうSasih ketigaだということ。（だいたい8月下旬から9月にかけて）

さて、約束の時間にグスティ君宅を訪れると、グスティ君のかわりに奥さんが出てきた。「今、デンパサールに行ってるの…」 あれぇ？　デンパサールだなんてずいぶん遠いところへ…。ま、こんなもんかぁ。このまま帰るのももったいないし、探険（？）をすることにした。村の中央を走るメインストリート（…と呼んでもいいのか？　と迷ってしまうような小さくてかわいい通りだ）の両脇に建つ家々は道路より高いところに建てられていて、道路から門までかなり長い階段でつながれている。街では見かけないつくりだ。ちょっとした谷底を歩いているような雰囲気。

あちこちで子供達が甲高い笑い声をあげながら遊んでいる。本当に楽しそうで、キラキラはじけてる。こっちも思わず笑顔になってしまう。それを見守る大人達、目があうとニコッと微笑んでくれる。本当にバリの人達の笑顔はすてきだと思う。心に余裕のある人にしかできない笑顔。造りものではない、自然に滲みでてくる笑顔。どこの国からきたのか分からない外人に微笑みかけるなんて、日本ではほとんどありえないこと。笑顔は心を豊かにしてくれると思う。現に、散歩途中に微笑みを交わしただけで、なんだか妙に幸せな気分だもの。これからは私も笑顔を心がけよう！　（…「ニヤニヤして気持ち悪いなー」って言われたりして。自然な笑顔って造ろうとしてできるもんじゃないよね…）

のんびりとジャラン・ジャランを楽しんでいるその時、頭に荷物をのせたオバチャンが前からやってきた。オバチャンは道をそれ、けもの道のような道なき道へ入っていく。むむ…彼女は一体どこへ!?　これは尾行するしかないぞ！（なんで？）　土のでこぼこ道はかなり急に下っていく。一応足場らしきものはあるけれど…。オバチャンは平気でスタスタと歩いていくのだが、日頃から運動不足の私は、とてもじゃないけどついていけない。あっという間にオバチャンを見失ってしまった。でもここまで来たんだから…と、ひいひい言いながら歩いていくと突然視界がひらけ眼下に川が見えてきた。わぁ、こんな風景が隠されていたんだ…。緑におおわれた深い谷間に、清く美し

い水がたゆたゆと流れている。岩にぶつかって流れが変わったところが太陽を照りかえし、きらっと輝いてみせる。ちょっとした秘境に出会ってしまったような気分。

川までおりてみる。水にふれると心地よい冷たさが指先を包んだ。ふ…と水浴びをしたいという欲求が心をよぎる。道なき道をおりてきて、身体は汗だく。ここでマンディしたらさぞ気持ちいいだろうなあ。しかもこんなにきれいな景色。辺りを見回すと、遠くの岩かげでさっきのオバチャンが洗濯をしているだけで、他に人影はない。かねてから川でマンディをすることに憧れていた。バリ人の友人が言っていたことを思い出す。「今は家にカマル・マンディがあるけど、昔はそ

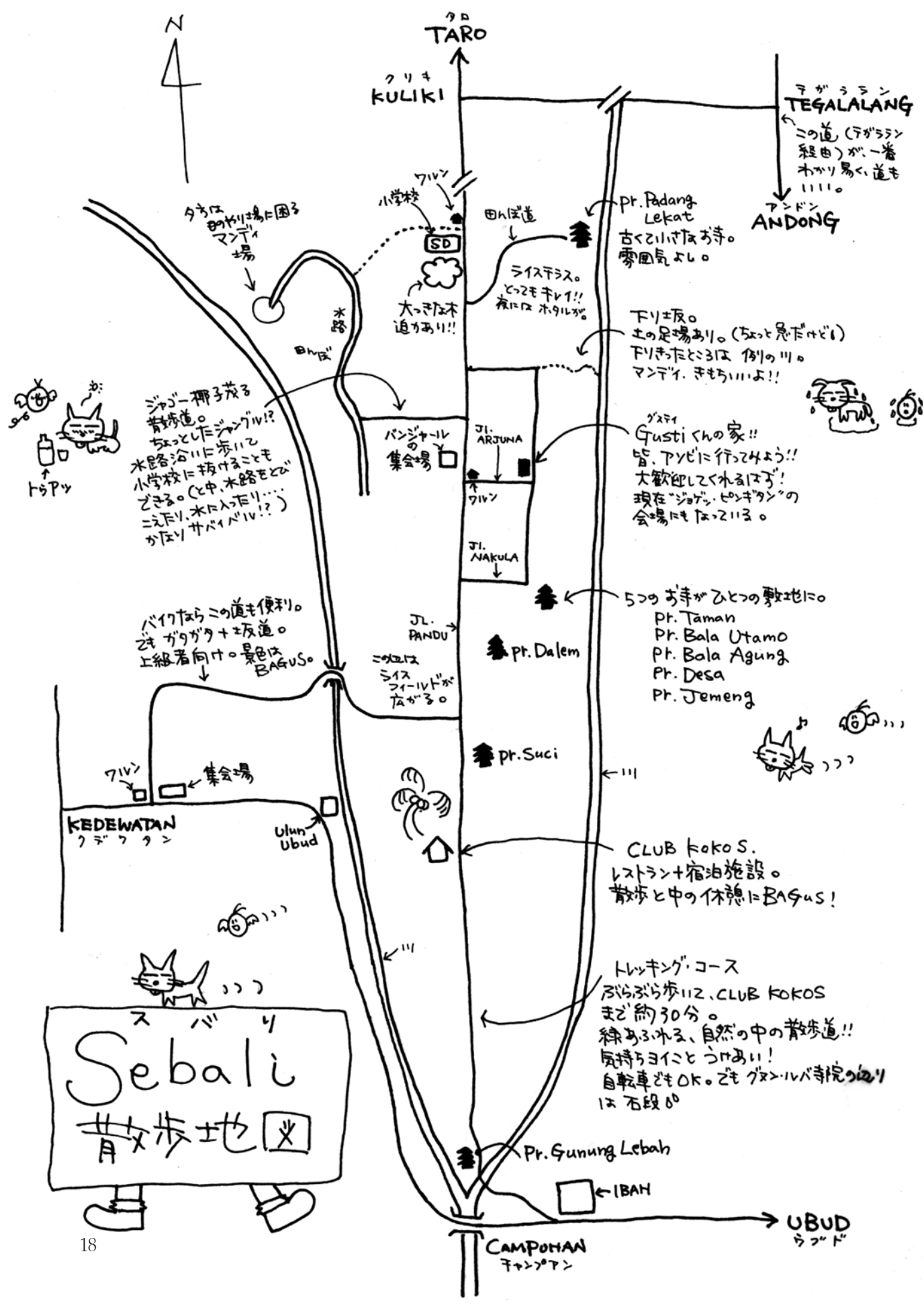
体験記

んなのなかった。皆、近くの川でマンディするんだ。近くに川がない人達は、田圃の用水路とか。川でマンディするのは最高に気持ちいいよ。今でも時々川まで行くんだ」 …これはその“最高に気持ちいいこと”をするチャンスだ！　しかし、いくら誰も見ていないとはいっても、なんの囲いもない場所で素っ裸になるのは結構勇気がいる。突然なにかが起きても、そんな無防備な姿じゃどうしようもないし…。誰かが来ちゃったらどうしよう…。見られても恥ずかしくないナイス・バディじゃないしな…。あれこれ消極的な考えが頭をまわる。でも、これをのがしたら、二度とチャンスは訪れないかもしれない。…えいっ！　思い切って服を脱ぎ、持っていたタオルを腰にササッと巻付け、そろそろと川に入る。…おおーっ!!　なんという気持ちよさ。汗にまみれた身体がひんやりした水に清められていく。身体を包み込むような水の流れが疲れを取り去ってくれる。見渡せばどこまでも続く緑、真っ青な空…。聞こえるのは川のせせらぎと鳥の声。さっきまでの恥ずかしさはどこかへ行ってしまった。なんという解放感、そしてなんというすがすがしさだろう。これは想像以上にきもちいいぞ、こんな気持ちいいことがバリ人にとってはスダ・ビアサだなんて、うらやましい限り。カマル・マンディはあっても、川でマンディをするバリ人の気持ちが分かった気がする。

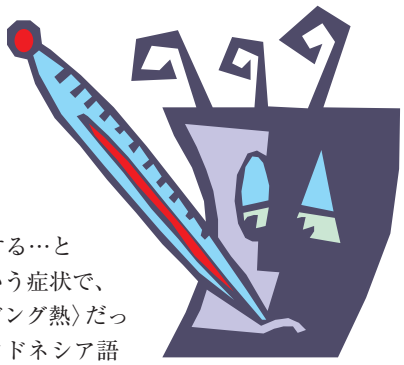
しかし、こんな話を聞いたことがある。「最近は川が汚れてきて、ヘタにマンディすると肌があれちゃったりするの。だから時々、友達を誘ってわざわざ遠くの川まで行ったりするのよ」 …川が汚れてきていることは事実だ。街に流れる川は茶色く濁り、ゴミなどが浮いていることもしばしば。それでもマンディーしている人も見かけるが、きれいな水の方が嬉しいに違いない。

以前、バトゥブランに流れる川があまりにも汚れてきているのに気付いた村人達が、村長に訴え、村議会で調査を行なったそうだ。その結果、バトゥブランの北、シンガパドゥにあるバリ・バード・パークが汚水を川に垂れ流しにしていたことが発覚。怒った村人達の訴えにより、現在は自然濾過装置を作った、ということだが、もしも訴えがなかったら…？　バード・パークは明らかに観光客のためのもの。安くはない入場料を払って訪れるバリ人はそうはいない。聞けばヨーロッパの企業との合弁とか。つまり汚染に関しては充分に知識を備えているはずの人々が関わっているということ。それなのになんというザマなの！　自分の国でなければどうでもいいや、って考えてたわけ？　地元の人達から文句言われてやっと気付くなんて、恥ずかしいこと。

つい、バード・パークを例にしちゃったけど、こういうことって、他にももっとあると思う。日本人が関わっていることもあるだろう。もちろん私自身だって知らず知らずのうちに…。このままいったらもしかすると、川でのマンディは昔話になってしまうかもしれない。そんなのさみしいよ…なんてそんな感傷はバリ人に言わせれば“旅行者の身勝手”なのかも…。あぁ、難しいことを考えちゃった。知恵熱でそう…。でも考えてるだけじゃ、どうにもなんないし、私は私なりに、バリにおじゃまさせてもらってる人間として、バリを大切にしていこう！　大切なのはひとりひとりの行動よ！　うん、それしかない！　…なんて無理矢理まとめつつ、すっかり川でのマンディを満喫したところで服を着、もと来た道を引き返すことにした。あー、ほんっと、気持ちよかった！　しかしここではたと問題に気付く。帰り道は急な登り坂。呼吸は弾み、たった今清めたはずの身体が、みるみるうちに汗ばんでいく。ああ～こんなはずじゃ…。ぜぇぜぇいいながらけもの道をぬけると、そこには自転車に乗ったグスティ君がいた。あ、帰ってきたのね。「どこにいたんだい？」…って、それはあなたです。「探しちゃったよ」…とやけにさわやかな笑顔で、くたくたの私を迎えてくれたのだった。


N
TARO
タロ
KULIKI
クリキ
TEGALALANG
テガララン
この道（テガララン経由）が、一番わかり易く、道もいい。
ANDONG
アンドン
ワルン
小学校
SD
田んぼ道
Pr. Padang Lekat
古くて小さなお寺。雰囲気よし。
ライステラス。
とってもキレイ!! 夜にはホタルが。
大きな木 迫力あり!!
タちは 毎やり場に困る マンディ場
水路
田んぼ
下り坂。
土の足場あり。（ちょっと急だけど）
下りきったところは 例の川。
マンディ、きもちいいよ!!
ジャジー椰子茂る 散歩道。
ちょっとしたジャングル!?
水路沿いに歩いて
小学校に抜けることも
できる。（と中、水路をとび
こえたり、水に入ったり…
かなりサバイバル!?）
トラアッ
バンジャールの集会場
Jl. ARJUNA
ワルン
Jl. NAKULA
Gusti くんの家!!
グスティ
皆、アソビに行ってみよう!!
大歓迎してくれるはず!
現在"ジョゲン・ピンギタン"の
会場にもなっている。
5つのお寺がひとつの敷地に。
Pr. Taman
Pr. Bala Utamo
Pr. Bala Agung
Pr. Desa
Pr. Jemeng
バイクならこの道も便利。
でもガタガタ+坂道。
上級者向け。景色はBAGUS。
Jl. PANDU
Pr. Dalem
この辺は
ライス
フィールドが
広がる。
Pr. Suci
ワルン
集会場
KEDEWATAN
クデワタン
Ulun Ubud
CLUB KOKOS.
レストラン+宿泊施設。
散歩と中の休憩にBAGUS!
トレッキング・コース
ぶらぶら歩いて、CLUB KOKOS
まで約30分。
緑あふれる、自然の中の散歩道!!
気持ちヨイこと うけあい!
自転車でもOK。でもグヌン・ルバ寺院の辺りは石段。
Sebali
スバリ
散歩地図
Pr. Gunung Lebah
IBAH
UBUD
ウブド
CAMPUHAN
チャンプアン

デング熱って何 !?



先日、「極通」スタッフの友人が突然の高熱におそわれ、入院する…といった、事件がありました。40 度近くの熱、食欲不振、吐き気…という症状で、しばらくは原因不明の不安な状態だったのですが、検査の結果、〈デング熱〉だったということが判明。〈デング熱〉（デング出血熱ともいい、インドネシア語では Demam Berdarah Dengue といいます）はこの 1998 年に入って、インドネシア中で流行しているということ。なんと死者も出ているとか。「極通」スタッフのひとりが暮らす村でも、18 歳のうら若き女子高生が命を落としてしまいました。幸い、友人は大事には至らず元気に回復してくれましたが、この病気、なめてかかってはいけないようです。

さて、最近テレビや新聞でよくとりあげられ、巷で話題のこの〈デング熱〉、いったいどんな病気なのでしょうか。以下、バリ・ポストから要約してみました。

★デング熱はデングウィルスが引き起こします。現在、4 タイプのウィルスが存在していて、これらはインドネシアの様々な地域で発見されています。この病気はアエデス・アエジプティ及びアエデス・ボピクトゥスという 2 種類の蚊によって媒介されます。この 2 種類の蚊は、海抜 1000m 以上の高地を除いてインドネシアのほぼ全域に生息しています。これらの蚊はからだは小さく、基本色は黒、何本もの白い線が入っているのが特徴で、家の中や家の外のやや暗いところに潜んでいます。夜になると家の中で休んでいたり、家の下の繁殖地に近いところにいます。卵は直射日光の当たらない日陰の澄んだ水に産み付けられ、それは家の中やそれに近いところが選ばれます。

一度 4 タイプのウィルスの 1 つに感染し、その後 6 か月から 5 年以内に再び他のタイプのウィルスに感染すると、両方の抗体のあいだに免疫反応が起き、“デングショック症候群”と呼ばれるデング熱の症状を引き起こします。その症状は、

1. 突然の高熱におそわれ、2 日から 7 日間続く。
2. 手足に斑点状の出血が現われる。
3. 心臓肥大。
4. 脈拍が弱くなり早まる。血圧の低下（80 以下）とともに皮膚が冷たくなり、湿りを帯びてくる。とくに鼻、指、足の先端。患者は不安で落ち着かなくなり、唇の周辺が青くなる。

で、流行の周期は 5 年。1998 年はこの周期に当てはまっているので、その情況が危ぶまれます。

こんなに危ない病気だったのですね。しかし、恐がってばかりはいられません。私達のできる予防策は、1、蚊が繁殖するような水溜まりをつくらない。　2、蚊取り線香、虫除けスプレーなどを用い、蚊に刺されないように心がける。…ということ。そして、調子の悪い時は決して無理をしないこと。万が一、デング熱の症状がでてしまったら、すぐに病院に行きましょう。不治の病というわけではないので、適切な治療を受けることが大切！…いずれにしろ、病気はからだが弱っているときにかかりやすいもの。日頃から健康を心がけて、楽しいバリ生活が送れるようにしたいものです。以上、デング熱の報告でした！

放浪三昧

■ハルガって？

インドネシアの工場で作られる商品には、一応「ハルガ」と呼ばれる定価が書き込まれています。が、これがどうにも、日本人には理解できないものです。

どうもハルガは、「定価」と訳すよりも、「メーカー希望小売価格」と訳した方がいいのかも知れません。

商店では、ハルガより高く売っている場合もありますし、安く売っている場合もあります。おそらくカリマンタン島などの遠隔地では、輸送費などのため、ハルガよりずっと高く売られていることでしょう。

ハルガは、あくまで、「一応の目安」くらいに考えた方がいいみたいですね。

■外人価格と地元価格

よく、「外国人には、物を高く売り付ける。」ということを聞きます。観光地では特にそうです。でも、本当にそうでしょうか？

ひとつ、商人の側に立って考えてみて下さい。誰でも、お得意さんには負けてあげるでしょう？　バリ人とて同じことです。彼らは、「外人に高く売る」のではなくて、「地元の人に安く売っている」のです。

あなたが、最初の言い値よりずいぶん負けてもらったとしましょう。これはしかし、「適正価格に負けさせた」のではなく、「値引きしてもらった」と考える方がいいんじゃないでしょうか。

「外人価格」が本来の値段で、バリ人相手に売る時にはすべて「お馴染（なじ）みさん価格」なのですよ、実は。…だって、そう考えた方が、ハッピーになれるでしょ！

えとぶん　はとう　ゆきお

■日本人価格

外人価格の中でも、「日本人価格」は一番高いと言われています。

でも私には、これを非難する気はありません。だって、日本人の観光スタイルを考えれば…、ねえ。

それにどうしたって、日本人はやっぱり金持ちですもの。

例えば、ギリ・メノウで海藻を採っている漁民の収入なんて…。養殖して、収穫して、浜辺でパリパリに乾燥させた海藻の売り値が、日本円になおして、一キロで四十円なんですよ。

都市の工場労働者の賃金が、月一～三万円くらいですし。

どんなに日本人が、「私は貧乏旅行者だ。」と、言いはっても、現地の庶民達とは、絶対的な差があるのですよ。

■変動相場制

インドネシアでは、多くの価格が変動相場制といえるでしょう。状況と、客の顔色によって変動するわけです。

ロビナ・ビーチでも、こんなことがありました。

ブラタン湖へのツアーを近くのホテルで申し込むと、四千円（日本円に換算）と言われました。

「いらん。」と言うと、すぐに三千円になりました。

それでも、「そんなに興味ないしなあ。」と渋ると、二千五百円に。さらに、「やっぱいいよ。」と帰りかけると、「二千円！」と、声がかかりました。

よろこんでOKして、自分のロスメン（安宿）まで帰ると、なんと玄関に、「ブラタン湖一日ツアー、千五百円」という掲示がありました。

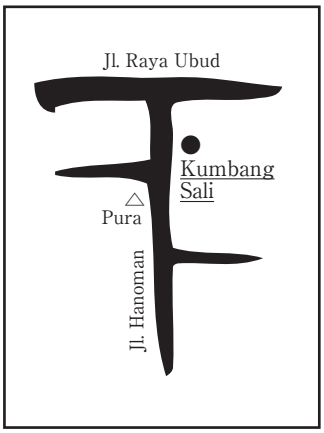
ガ、ガチョ～ン！

※編集部注：文中の円換算レートは数年前のものです。

Toko ◇ BEST 店

Kumbang Sali

極通 18 号でご紹介したタガス在住の家具デザイナー鈴木純夫さんと、ギャニアール在住のガラス作家鳥毛清喜さんのお二人のアートスペースがウブドにオープンしました。ジャラン・ハヌマンがジャラン・ラヤ・ウブドに突き当たる少し手前、白壁の鮮やかな空間です。以前この欄でご紹介した雑貨のお店“Kacak Perak”でも鳥毛氏のガラス工房の小物を購入出来ますが、ここでは“え、こんなものまで”というようなものがガラスでつくられていて思わずびっくり。ランプ・シェードにガラスの花をあしらったスタンド、風に揺れるテーブルクロスまで表現しているガラスのテーブル、など。独特のブルーグリーンの色合が清々しく、けれどその優しいフォルムには、まるでガラスとは思えないほどの暖かさがあります。鈴木氏の作品は、遊び心いっぱいの木の椅子や、和紙を使った照明器具、そして自ら撮影したバリやアフリカのモノクロ写真に特殊な絵の具で彩色を施し、和紙から図柄が浮かび上がる様につくりあげたポートレイトの数々。写真そのもののリアルさが薄れ、古い、懐かしい思い出の品に出会ったような柔かみを感じさせます。勿論全ての作品は購入可能。お気にいりを見付けて、あなたのリビング、もしくはベッドサイドに置いてみてはいかがでしょう。ウブドの新しいアートスポットのご紹介でした。

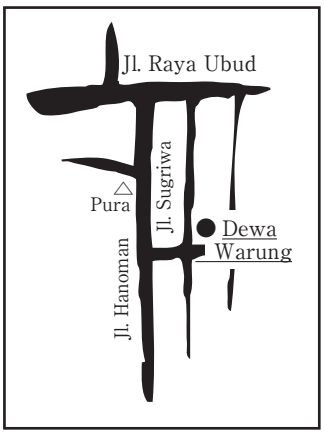


Jl.Hanoman NO.12　　phone: 974162　　open: 10:00 ～ 19:00

Warung ◇ 味な店

Dewa Warung

ウブド熱愛症候群が高じて、とうとう“長期滞在”という症状が出てしまった患者の方々にとって、もうすっかりおなじみのお店を今回ご紹介します。デワ・ワルン。今をさかのぼる事 5 年、現在は駐車場となっているパサール横の空き地に軒を連ねていた懐かしいナイトマーケットの屋台。そこで毎夜一番の盛況さを誇っていた屋台がありました。そこで腕をふるっていたコックが現在このジャラン・スグリワに店をかまえるデワさん。とにかく“安い”。ミーゴレンとチャプチャイを頼んで、コーラを飲んで、今時 5,000 ルピアとはやっぱりエライ店です。赤い色に染められたチャプチャイ、辛いんだか甘いんだかよくわからない、フーヨンハイの上にかかっているソース…そう、これは言ってみれば“禁断の味”！　どんどん中毒になっていく、まるで袋を開けたら止められないベビースターラーメンの様な“誘惑の落し穴”！　時は移り場所は変われど、デワさんの料理は変わらず。今日も又、新たにウブド熱愛症候群にかかった若い男女で賑わうデワ・ワルン…。なお、“禁断の味”を食して、病状が一時的にでも軽度に戻るかというと、それはけして保障できません。とにもかくにも、お試しあれ。



Jl.Suguliwa No.33　　open: 10:00 ～ 23:00

私の常宿

Pondok Manis

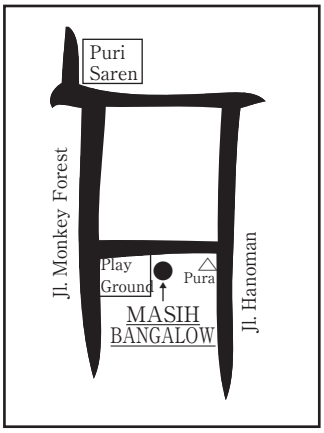
MASIH BANGALOW

河野由紀

パサールからJl.Monkey Forestに入り、サッカー・グランドの手前で左に折れる道、Jl.Dewi SitaにMASIH BANGALOWはあります。スパゲティーのおいしいレストラン、APA KABARの横に看板が出ていて、階段を登るとフロント。オーナーの奥さんイブ・スーが元気な笑顔で迎えてくれます。

部屋のタイプは旧館、新館の２種類があり、旧館は多少古いもののバスタブがついているのが魅力。新館の方は明かりもあかるく、清潔でキレイ。両方ともガンガン使えるホット・シャワー付きです。朝食もいくつかあるメニューのなかから自由に選べるので、毎日同じであきてしまった…ということもありません。

なにしろオーナー家族が一緒の敷地内に住んでいるので、女の子の一人暮らしでも安全。アットホームかつプライベートもしっかり確保できる、私のお気に入りの宿です。



Monkey forest Area Dewi Sita Road
Tel：0361-975062

旅人一声 Pesan & Kesan

うぶっなウソ、うふっなホント

Kumi

年に一度（幸運な年には二度）のウブド通いを続けて５年目になる。新婚旅行でバリに行くという友人がいれば、大手旅行会社の「ビーチエリア豪華ホテル宿泊ツアー」をキャンセルさせて目的地をウブドに変更させ、挙げ句の果てにその新婚さんにくっついて行ってしまうほど、ウブドにハマっている。

私がバリ好きだと知った人は、たいてい「どうしてそんなに気に入っているの？」と聞いてくる。もちろん、答えられる理由はたくさん持ちあわせているのだが、最近よく使っている私なりのオフィシャルな答えがある。それは「実はおじいちゃんがバリ人で、私はインドネシアと日本とのクォーターなんです。だから１年に一度、お墓参りに行かないと…」

沖縄出身？とよく聞かれる“濃い顔系”なので､10人にひとりは私のこんなウソを信じてくれる。そこで私は悪ノリをして、さらにこんなウソを重ねるのだ。

「そう、おじいちゃんは12人兄弟の長男で、名前はイ・ワヤン・デンスクッっていうの。デンスクッのクッ、は、飲み込むように発音してね！」

ちなみに私の幼稚園の入園式の最中にポックリ逝ってしまい、入園初日から私を早退させたおじいちゃんの名前は「伝助」さんである。でも、このウソも、５人にひとりは信じてくれる。

そんな心優しい人がその後にもしも私の年齢を尋ねたとしたら、こう答えることにしている。

「あのね、バリって210日で１年なんですよ。だから計算し直さないとちょっとわからないなあ」

ここまでくるとさすがにバレバレだが、まあ、相手を傷つけるわけではないので、今のところこのウソの三段重ねを楽しんでいるというわけだ。

実は今年の春、あまり後先考えずに、テガランタンに土地を少々買ってしまった。これだけはホントの話なのだが、日本では誰も信じてくれない。まあ、それはいいとして、これから少しづつプランを立てて、その土地にのんびりと家を作っていこうと思う。家ができたからといって、急に旅人から村人に変われるわけではないけれど、私のウブド通いはこれからますます回数を増やしそうだ。

その他のニュース

■エナちゃんは怒ってるゾっ！≪うぶど君≫って何？！

このごろのUBUDは、ますます観光地化が進み、道を走る車が増え渋滞するようになってきました。ちょっと車やバイクで走ると渋滞に巻き込まれ、ちっとも前に進まないこともしばしば。そんな時、前方を見ると…、道幅と同じくらいの幅を持つピカピカの大型観光バスがいる。路肩までいっぱいに寄っても、対向車が横を通れないで立往生。あんな大きなバスが、こんな狭い道を通るのがそもそも間違っているんじゃないかい？　…と、ふつふつ怒りが込み上げてきて、そのバスをよく見ると…フロントにでっかい日本語で≪うぶど君≫と書かれたパネルが貼ってある。ぬぬぬ…≪うぶど君≫って、いったい何物じゃっ？！

それ以来、UBUDの村道でしょっちゅう渋滞を巻き起こしている≪うぶど君≫を目撃。あまり腹が立って、ある日、≪うぶど君≫が駐車してあるカフェ・アルマに行ってみた。そしたらなんと、カフェ・アルマの掲示板に≪うぶど君停留所≫と書かれたプレートが貼ってあるではないか。そこに書かれた「スケジュール表」なるものを見てみると、プラザバリ、DFS（クタ）、バトゥブランのバードパーク、アルマなどとなっていて、なんと≪うぶど君≫は1号、2号、3号まであるらしいのだ。

実は、この大型観光バスはルック・JTB（日本交通公社）のお客さんのみが使えるプライベートの循環バスであったのだ。お客さんに対するサービスで始めたのはわかるが、UBUDの狭い道を循環するには明らかにバスが大き過ぎるし、そんなでかい図体をしたやつほどせまい道をわがもの顔で突進するものだから、自転車に乗った日にゃあそれはもう、路肩に突き落とされそうになるのだゾッ！！それにさっきから書くのを忘れていたが、UBUDを走る≪うぶど君≫に、お客さんがひとりとして座っていたのをまだ一度も見たことがないのだ。ただでさえ渋滞気味のUBUDの町に、カラの大型バスが徘徊するなんぞ大迷惑！！　それも、日本人のわがままな発想だけで、乗り込んでくるなぞもってのほかである。日本人の常識が問われるゾ！　と怒りが湧いてきた9月に入って、≪うぶど君≫が小型バスになっていた。そして、初めて2～3人の日本人ギャルがバスに座っているのを見た。まあ、これもしょうがないかしら…。

でも、なんだかやっぱり釈然としない「エナちゃんは怒ってるゾ！」なのであった。

■ PDIの赤い旗、爆走!!

のっけからワープロで「ばくそう」を漢字変換したら「バクソ生」と出て、クソッ‼
なんてまるで編集長のノリになってしまいましたが、今、バリに来るとそこら中に、PDI（ペー・デー・イー）の赤い旗が立っています。

PDIはインドネシアの野党のひとつで、共産主義とはなんの関係もありません。初代故スカルノ大統領の娘のひとりであるメガワティを中心に、現政府に対して厳しく改革をせまるなど、今、民衆の熱い支持を受けている政党です。赤色が党のシンボルカラーで、村や街の道沿いはもちろん、車やバイク、人々の着ているTシャツまでが赤色と、シンボルマークである水牛、メガワティの顔とロゴでうめつくされ、ちょっと迫力。何十台も、時には百台をこす車やバイクが、PDIの大きな旗をふり回しながら昼夜かまわず爆走する様子はまるで暴走族。何事においても熱くなるのは若者のいいところでもあり、欠点でもあるのはどこの国も一緒。ましてや政情が変わりつつある今、民衆がやっと自分達の主張を公にあらわせるようになったのです。彼らがよりよいインドネシアを築き上げてくれるのを願うばかりですが、ここで皆さんにアドバイス。もしあなたがバリに来て、

まだこの状態が続いていたら、レンタカーやバイクで道を走る時は要注意。
PDIの団体とぶつかったら、すみやかに路肩に寄り、彼らが通り過ぎるのを静かに待ちましょう。また、レンタカーやバイクを借りるときは、黄色じゃないものにしましょう。黄色は与党であるゴルカルのシンボルカラー。熱くなっている若者達を刺激しないようにするためです。「極通」スタッフの友人のひとりで長期滞在者のSさんは黄色が大好き。バイクもヘルメットも黄色ですが、先日、道を走っていたらPDIの旗を掲げたバイク二台に両側からはさまれ、ジロジロにらまれて恐い思いをしたそうです。次の日からSさんのヘルメットは赤色に替わったそうな。以上、エナちゃんのレポートでした。

■ 早くも雨季到来?!

ただいまBALIはSasih Kapat。(第四月)。本来なら多くの木々に花が咲き、季候は涼しく、まだまだカラリとしている時期のはず。ところがどうしたことか今年は9月の終わり頃から毎日雨が降り続き、朝〜昼ごろのほんのしばらくの太陽の光が強烈にジリジリ、ムシムシと暑く、ちょっと異常気象っぽいBALIです。

おとなりの4コママンガにもあるように、なかなか洗濯ものが乾かずにタイヘン。短い晴れ間に、「今だっ、それっ!!」っと洗濯ものを外に出したまま外出し、出先でどしゃ降りにやられて帰宅してみると…、「あっちゃ——っ…o」ってな具合で、どうしてもランドリーの世話になるのですが、これまた料金が値上ってトホホなのです。

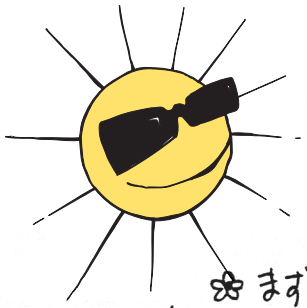
10月下旬から「雨が少ない」はずのSasih Kalima(第五月)になりますが、どうやら今年のBALIは、早くも雨期(雨季?)到来のようです。

これからバリに来る方は、雨の日のために、お気りに入りの本など、部屋で時間をつぶせるアイテムなんか持ってくるといいかもしれませんね。トランプで宿のスタッフの子達と神経衰弱とかもおもしろいかも…。

★★★

うぶっな人々 その28 ほりり

【年間購読申込み方法】
エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会:伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座:00190-6-573859「影の出版会」です。



●おしらせ●

さてさて今年もそろそろ年末年始の催しものの予定を立てなくちゃ、ということで、とりあえず決まってる分だけお知らせすることにしましょう。

❀まず、おなじみ Jegog ―ジェゴグ―です。

11月/1日、15日、22日（いずれも日曜日）
12月/6日、20日（〃）
12月27日…スペシャル ムバルン＝場所はまだ未定
1月/3日、10日、17日（いずれも日曜日）

スウェントラ氏はじめサンカル・アグン村の団員はますますパワフル!!
最近はもうロック・バンドの川で私達をコーフンさせてくれます。必見!!

❀次は Joged Pingitan ―ジョゲッ・ピンギタン―
12月30日（水曜日）
まるでタイム・スリップしたかのような、ミラクル・パワーを感じてしまう、スバリ村のジョゲッ・ピンギタン。静かに、でも確実に、観衆の脳髄にヒタヒタと迫ってくるスゴイパフォーマンスです。

❀初めて会ったその日から…ジャジャーン!! やっぱり、ボクも私も大ファンです。Semara Ratih ―スマラ・ラティ― ファンの集い!!
1月1日（金曜日）スペシャル・キャーターでアリムに、アユに、オカちゃんにかぶりつけます（なんのこっちゃ）公演後はメンバーとともにごはんでも…。
場所は今、検討中です。

以上、おしらせがはみ出してしまいましたが、その後のくわしい情報は、次号の極楽通信か、もしくは現地・居酒屋・影武者かAPA？情報センターにて公開します。おっ楽しみに!!!

でんごんばん

Pengumumaan

先日、ある友人と、インドネシアのエコノミーの現状について話をしていて、エリちゃんはこんな話を聞きました。
この物価高の中、バリや他の島々の貧しい子供達が、学用品が買えずに、中には小学校を途中でやめてしまう子もいるというのです。「今度のバリ旅行には、友だちの家族に何かおみやげでも買っていこうかな」と思ってくれている方がいたら、子供達のための学用品（ノート、えんぴつ、なんでも）なんていうのはいかがかしら?!
きっと喜ばれるはず。将来のインドネシアをしょって立つ子供達を応援してあげようよ!!

Terima Kasih

発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 ／ 佐藤由美 ／中田 恵

桑野貴子／堀祐一／菅原恵利子

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真： 伊藤博史

カバー：伊藤博史

極楽通信「UBUD」Vol. 28

1998 年 10 月 20 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16,Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)973134

©1998　影の出版会　禁無断掲載

影の出版会事務局

● BALI 本部　Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)973134

●日本連絡先　〒 143　東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内 , tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101